

古今の草子を御記に置かせ給ひて、歌

どもの本を仰せらわひ、「うわが未、いかに」。と問はせ給ひて、すべし、夜摩心に
かかしておほゆるもあるが、けぢやひ申
つむひらねば、いかなるぞ、宰相の御
ぞ、十ばかり、それもおほゆるか、まじ
て、五つ、六つ、なむは、ただおほえぬ
しを、啓すべけれ、「ぢや、すべし、十二

く、仰せ言を映えなつてもなすべし」。

と、わひ、くちを、うがるも、をかし。知

ると申す人なきをば、やがてみな読み続

けて、夾算せさせ給ふを、「うわは、知り

たることぞかし。なごかつ、したなごほ

あるぞ」。と言ひ嘆へ。中にも、古今あま

(改ページ)

た書き写しなごする人は、みなもおほえぬべきことぞかし。

問題様 「この話における登場人物」は暗黙の了解とする。そうしないと問題が続かないので

一傍線部「古今の草子」とは何のことか、答えよ。また、「草子」に対応する語を漢字で答えよ。

二傍線部「御前」とは何のことを言っているか、答えよ。

三傍線部「置かせ給ひて」を口語訳せよ。また、品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよ。また、この動作の主体を答えよ。

四傍線部「ども」を文法的に説明せよ。

五傍線部「本」とは何のことか、何を言っているか、答えよ。

六傍線部「仰せられて」を口語訳せよ。また、品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよ。

七傍線部「これ」とは何か、文中の語で答えよ。

八傍線部「未」とは何のことか、また、この語と対になる語が文中にあるが、その二語を含む四字熟語とその意味を答えよ。

九傍線部「いかに」の意味を答えよ。

十傍線部「問はせ給ひて」を口語訳せよ。また、品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよ。また、この動作の主体を答えよ。

十一傍線部「すべて」の意味を答えよ。

十二傍線部「おほゆるもあるが」を口語訳せよ。また、「重傍線部」が、の品詞と文法的働きを、根拠を明示して説明せよ。

但し、「格助詞・接続助詞・田河十重・(二二二の年号)の五語を用いて説明するべし」。

十三傍線部「けぢやつ」いかなるぞ」を口語訳せよ。また、活用語を指摘して、それぞれ必要と思われる文法的説明をせよ。

十四傍線部「宰相の君」とあるが、一般に誰のことをあるとされているか、答えよ。

十五傍線部「ぞ」は係助詞であるが、結びはどうなっているか、答えよ。

十六傍線部「十ばかり」とあるが、誰が、誰に、何を「十ばかり」ごしたのか、本文の内容に即して答えよ。

十七傍線部「それ」とは何のことか、文中の内容に即して答えよ。

十八傍線部「おほゆるかは」を(減点対象とならぬように)口語訳せよ。

十九傍線部「まいり」ってどういう意味、

二十傍線部「五つ、六つなどは」を、必要と思われる表現を補って口語訳せよ。

二一傍線部「ただ」啓すべけれ」を口語訳せよ。また、品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよにはいられない。

二二傍線部「ぢやは」もてなすべき」を口語訳せよ。また、文法的に注意すべきことがある場合は、それも併せて答えよ。

二三傍線部「わび」とは何のじい意味か、答えよ。また、この動作の主体は何か、答えよ。

二四傍線部「をか」とあるが、これは誰の意見か、答えよ。

二五傍線部「知るとくなきをば」の、「申す」を文法的に説明せよ。また、「を」の前に省略されている語を文中から探して答えよ。

二六傍線部「やがて」夾算せさせ給ふを」を口語訳せよ。また、品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよ。

「夾算」の読みを答えよ。尚、この部分にはある文法的イベントが発生している。それは何か、答えよ。

二七傍線部「これ」とは何か、答えよ。

二八傍線部「知りたることぞかし」について、付属語を抜き出し、品詞、及びその文法的意味、または働きを答えよ。

二九傍線部「なごかつ、したなごほあるぞ」を口語訳せよ。また、これは誰の発言か、答えよ。

三十傍線部「古今あまた書き写しなごする人」を口語訳せよ。また、「あまた」に適切な漢字を充てよ。

三一傍線部「みなもおほえぬべきことぞかし」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。

解答仕様

一 「古今の草子」=「古今和歌集の二じ本」 対応する語「巻子」(かんず。巻物)

二 「御前」=「中宮定子の前」(文中に「中宮定子」と明記されていないが、常識としていじらる)

三 訳=「お置きになつて」(「置きなつて」も可。「(お)〜なる」=「(お)〜になる」。以下同様。但し不自然ならならぬこと)。
品詞分解=「力行四段活用助詞『置』+未然形『置か』+尊敬の助動詞『す』+連用形『せ』」

+尊敬の補助助詞『給ひ』+連用形『給ひ』+単純接続の接続助詞『し』。尚『せ給ひ』は「重尊敬」
主体=「中宮定子」(「定子」も可。「中宮」のみは不可。人物については古語辞典等参照のこと)

四 説明=「複数を表す接尾語」(接尾辞)も可だが国文法に於ては「接頭語」「接尾語」が適)

五 「本」=「(和歌の)上の句のじやを言ひける」(問題と答えは完全一致。「」がないものは不可)
六 訳=「おひきなつて」(「おひきつ」可。但し「重尊敬を意識した」)

品詞分解=『言ひ』の尊敬語+変助詞『仰す』+未然形『仰せ』+尊敬の助動詞『らる』+連用形『られ』+単純接続の接続助詞『し』。
尚『仰せられ』は「重尊敬」。七「これ」=「歌よの本」

八 「末」=「(和歌の)下の句」 四字熟語「本末転倒」意味=「物事の重要な部分と軽微な部分を取り違えること」
九 いみ=「どうしてものか」(基本的にはHow。文脈によつてWhat。)

十 訳=「問ひなつるが」(厳密には「問ひなつるがなせむ」。「お問ひになじあせむ」(なせむ)
品詞分解=「八行四段活用助詞『問ひ』+未然形『問は』+尊敬の助動詞『す』+連用形『せ』」

+尊敬の補助助詞『給ひ』+連体形『給ひ』+単純接続の接続助詞『し』。尚『せ給ひ』は「重尊敬」
主体=「中宮定子」

十一 意味=「総つじ」(総つ(スズメ))。「まじ」+動詞「まじり」+「こも」+名詞の意識も可と見えむ。

十二 訳=「覚えていじらふもある歌が」(「覚えていじる『かつかう』+うたもぞ。)

説明=『が』は「接続助詞」かつこの用法が現れるのは田河上皇が院政を始めた一〇八六年以降と見られる。
枕草子の成立は一〇〇〇年頃とされるから、本文の『が』は格助詞と見るのが適しむ。

十三 訳=「すむらむ甲上上はる」(「むがびきむ」の「む」の「む」の「む」)
活用語=「形容詞活用『けむす』+連用形『けむすむ』+音便『けむすむ』」

タ行ト一段活用助詞『言ひ』の謙譲語『申し出し』+未然形『申し出べ』
可能の助動詞『らる』+未然形『られ』+打消の助動詞『も』+連体形『む』
形容動詞ナリ活用『いかなり』+連体形『いかなりぬ』

十四 一般に=「藤原重輔の娘のじやであるやれむすぬ」

十五 結び=「首略されていじる」(「首略」と「消滅」は全く違つたもの注意)

十六 誰が=「宰相の君」 誰は「中宮定子」 何を=「和歌の下の句」 むひつた=「お答え申し上げた」(単に「答えた」も可)
十七 それ=「十首ほどの和歌の下の句をお答え申し上げたじや」(「〜じや」は「〜」+「なご」)

十八 訳=「覚えていじらふもあるがなせむ」(「英語ならは「...がや〜むす」も可)。
十九 意味=「まじり」

二十 訳=「五首、六首しかお答え申し上げる」(「むがびきむ」)
二 訳=「ただ覚えていじらふを申し上げるのがよむが」

品詞分解=「副詞『ただ』+タ行ト一段活用助詞『覚ゆ』+未然形『覚え』+打消の助動詞『も』+連体形『む』」
+名詞『も』+連用修飾の格助詞『を』+強意の係助詞『も』+変助詞謙譲語『啓す』+終止形『啓す』

三 訳=「そんなじやいじりしけなく」(「仰せ」を「まじらなく」取り扱ひじやがむもあるが「なせむ」)
文法的注意事項=「反語の係助詞『やむ』が係つて可能の助動詞『へく』が連体形となり、係り結びが成立している。

形容詞ク活用『はえなむ』の連用形『はえなむ』が音便となっている。

三三 意味=「困る」(「途方に暮れる」等も可) 主体=「女房たち」(文中にはなごが暗黙の了解としていじらる)
二四 「をかじ」=「筆者」(「いじり」パターン)の問いに対して「清少納言」はNG。「筆者」「作者」「編者」「撰者」は答える。

二五 説明=『言ひ』の謙譲語「(何故)こんな問題作じたのかと思ひ出せなご。」 首略語=「いじ」(「言」の「和歌」の意)
二六 訳=「そのまじり全つ読み続け」(「まじり」は「和歌」の意)

品詞分解=「副詞『やがて』+副詞『みな』+力行ト一段活用助詞『読み続け』+連用形『読み続け』+単純接続の接続助詞『し』」
+変助詞『夾算す』+未然形『夾算せ』+尊敬の助動詞『す』+連用形『せ』

+尊敬の補助助詞『給ひ』+連体形『給ひ』+連用修飾の格助詞『を』+読み=「やむいじり」
文法的イベント=「対偶中止法」(従つて「読み続け」の活用形は連用形であるが厳密には「中止形」であること)

二七 「これ」=「中宮定子が最後まで読み続けて夾算をはんだその歌」
二八 付属語=「たる」助動詞・存続。そ+係助詞・強意。かし+終助詞・念押し。「た」は「間投助詞・念押し」(「ついてもなご」)

二九 訳=「どうしていじり」(物覚えが悪いのだから)。「したなご」=「能力が(あつたご)」。発音は「女房」
三十 訳=「古今和歌集を何度も書物写したりしたじやある人」(漢字=「数多」(おほた) = many。)

三一 訳=「ほとむじに全部覚えていじり当然の歌」(「むもあるが」) 助動詞=「め」強意。くも。当然(「いじり」+「推量」の時)は「強意」(「め」)

「村上の御時」「宣耀殿の女御と聞こえけるは、小一条の左大臣殿の御娘におはしける」と、たれかは知り奉らむらむ、また姫君と聞こえけるよき、父大臣の教へ聞こえ給ひけるよしは、『一ころは、御手を習ひ給へ。次には、琴の御琴を、人よりこゝに弾きまわらむとおぼせ。おぼせ、古今の歌二十巻をみなつつかへさせ給ふを、御字問にはせさせ給へ。』とむむ、聞こえ給ひける、と聞こしめしおきて、御物忌みなりける日、古今をもて渡らせ給ひ、御几帳を引き隔てさせ給ひければ、女御、例ならずあやしとおぼしけるに、草子を広げさせ給ひ、その月、何のをり、その人のよみたる歌はいかに。』と問ひ聞こえさせ給ふを、かうなりけりと心得給ふもをかききもの、ひがおぼえをもし、忘れたるころもあらば、いみじかるべきこと、わりなつおぼし乱れぬべし。その方におぼめかしからぬ人、二、三人ばかり召し出でて、書石して数置かせ給ふとて、強ひ聞こえさせ給ひむほごなむ、いかにめでたう、をかしかりけむ。御前に候ひけむ人さへこそうらやましけれ。せめて申させ給へば、さかじつ、やがて末まではあらねども、すべてつゆたがふことなかりけり。いかでなほ少しひがこと見つけてをやまむと、ねたきまでにおぼしめしけるに、十巻にもなりぬ、『せらに不用なりけり。』とて、御草子に夾算さして大殿籠りぬるも、まためでたしか。

(改ページ)

【問題】「敬語」について、「説明」を求められたら、『(何という語の)「尊敬語・謙譲語」で「誰から誰への敬意」と答えること。一右の文の全二段落は、ひたすらある人物の発言となっている。その人物とは誰か、人物名を漢字十字で答えよ。』

二傍線部「村上の御時」の意味を答えよ。また、この時に行われた和歌に関する催しを何と言つか、答えよ。

尚、この時には筆者の父も編纂に参加した勅撰和歌集がある。その歌集の名称、撰者の氏名、及び撰者の総称を答えよ。

三傍線部「宣耀殿の女御と聞こえけるは」について、「宣耀殿」及び「女御」の読みを答え、全体を口語訳せよ。

四傍線部「小一条の左大臣殿」について、全体の読み、及び指し示している人物名を答えよ。

また、何故この人物は「つ呼ばれているか、簡潔に説明し、同様の表現を有名なものから一つ挙げよ。ヒントは「三舟の才」。(以下同じ。)

六傍線部「たれかは知り奉らむらむ」を口語訳せよ。また、敬語と助動詞を指摘し、文法的説明をせよ。

七傍線部「姫君と聞こえけるとき」の訳について、次のどれが適当か、適当なものを選び、根拠を添えて答えよ。

【選択肢】「姫君でいらしたとき」、「姫君と申し上げたとき」、「姫君でありましたとき」

八傍線部「父大臣のこと」について、「父大臣」の読みを答え、「教へ聞こえ給ひける」を文法的に説明せよ。

また、「父大臣の教へ聞こえ給ひ、たごはむといふことか、文中を参照して簡潔に答えよ。

九傍線部「御手を習ひ給へ」を口語訳せよ。また、敬語を抜き出し、文法的説明をせよ。

十傍線部「琴の御琴をよおぼせ」について、「琴の御琴」の読みと意味を答え、「人よりおぼせ」を品詞分解して文法的説明をせよ。

十一傍線部「さては」の文中での意味を答えよ。

十二傍線部「古今の歌」つかへさせ給ふを、こゝに「二十巻」の読みを答え、「つかへさせ給ふ」を品詞分解して文法的説明をせよ。

十三傍線部「御字問にはせさせ給へ」を品詞分解して文法的説明をせよ。

十四傍線部「なむ」は係助詞であるが、結びはどのようなか、説明せよ。

十五傍線部「聞こえ給ひける」を、文法的に説明せよ。

十六傍線部「聞こしめしおきて」について、主語を明らかにして口語訳せよ。また、何を「聞こしめしおき」たのか、説明せよ。

十七傍線部「御物忌みなりける日」について、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

十八傍線部「古今をもて渡らせ給ひて」を口語訳せよ。また、「渡らせ給ひて」を文法的に説明せよ。

十九傍線部「引き隔てさせ給ひければ」について、「この動作の主語、及びその目的とを答え、また、敬語について文法的説明をせよ。

二十傍線部「例ならずあやしとおぼしける」を口語訳せよ。

二二傍線部「広げさせ給ひて」を文法的に説明せよ。

二二傍線部「その月、何のをり、その人のよみたる歌はいかに」とは、誰が、誰に、どのようなことをしたのか、簡潔に説明せよ。

二三傍線部「問ひ聞こえさせ給ふを」を文法的に説明できるというところあるかも。

二四傍線部「かうなりけりと心得給ふ」を口語訳し、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

また、「かうなりけり」に至るまでの経緯を、文中を参照して簡潔に説明せよ。

二五傍線部「をかききもの」を品詞分解し、文法的に説明せよ。また、これは誰の意見・感想であると考えられるか、答えよ。

【問題は次ページに続く】

問題【前ページの続き】

二六傍線部「ひがおほえ」の意味を答えよ。

二七傍線部「忘れたる」ところもあらば」を口語訳し、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

また、「(あら)ば」について、文法的用法の同じものを次に示すものの中から選び、その用法を正しく記号を答えよ。

「選択肢」ア これをまことかと尋ねれば 昔めりし家はまわれなり (方丈記・ゆく川の流れ)

イ これがごと(私の歌の評判)を聞かばやと思ふべし、そこられたら聞かごとおほゆ (枕草子・二月ついでに)

ウ 命長ければ 辱多し (徒然草・あだし野の露消ゆる時なく)

エ 水行く川の蜘蛛手なれば 橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける (伊勢物語・東下り)

二八傍線部「いみじかるべきこと」は、出題者の立場に於いて、「こ」は問題ににくい。それはなぜか、簡潔に説明せよ。

二九傍線部「わりなうおほし乱れぬべし」を口語訳し、また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

三十傍線部「その方におほめかしからぬ人」を、「その方」を明らかにして口語訳した方がいいと思ふ。

三一傍線部「召し出で」の意味を答えよ。また、この動作の主体は何か、文中の語で答えよ。

三二傍線部「書石して数置かせ給ふこと」を、文脈を踏まえた上で口語訳せよ。また、「置かせ給ふ」を文法的に説明せよ。

三三傍線部「強ひ聞こえさせ給ひけむほごなど」を、主語と目的語を補って口語訳せよ。

また、「聞こえさせ給ひけむ」を文法的に説明せよ。

三四傍線部「いかにめでたう」をかしかりけむ」を口語訳せよ。また、「けむ」について、必要と思われる文法的説明をせよ。

三五傍線部「御前に候ひけむ人さへ」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出して文法的説明をせよ。

三六傍線部「せめて申させ給へば」を口語訳せよ。また、敬語を指摘し、文法的説明をせよ。

三七傍線部「さかしう」の意味を答え、何か言っておきたいことがあったら言いなれ。

三八傍線部「やがて未まではあらねども」を、省略されていると思われる表現を補って口語訳せよ。

三九傍線部「つゆたがぶことなかりけり」について、口語訳し、また、副詞を抜き出し、「これと呼応する語を指摘せよ。

四十傍線部「いかで」見つけてをまむむ」を口語訳し、また、副詞を抜き出し、「これと呼応する語を指摘せよ。

ついでに、「見つけてをまむむ」を品詞分解し、文法的説明をせよ。

四一傍線部「ねたきまでにおほしめしける」を口語訳せよ。また、敬語を抜き出して文法的説明をせよ。

四二傍線部「十巻にもなりぬ」について、「十巻」の読みを答え、また、活用語を抜き出して文法的に説明せよ。

四三傍線部「さらに不用なりけり」を口語訳せよ。また、副詞を抜き出し、「これと呼応する語を指摘せよ。

四四傍線部「大殿籠りぬる」を口語訳せよ。また、全体を文法的に説明せよ。

四五傍線部「めでたしかし」を口語訳せよ。

四六本文の末尾で「女御がいつになっても間違えない」「ついに二十巻のうちの十巻にまでノーミスで到達

天皇」「タメだじりや。」「天皇ノテ寝」(ふてくされて寝る)と「とつた流れがあるが」

天皇のこの行為は、考えようによつてはフエイントともとれる。その判断できる理由を、文中を参照して簡潔に説明せよ。

「なな」=「お」になる。不自然でない程度に」

解答編

一人名「一条天皇中宮藤原定子」(問題に制約がなければ「中宮定子」のみ。)

二意味「村上天皇の御代」 催し「天徳内裏歌言」 歌集名「後撰和歌集」

撰者「大中臣能宣・源順・清原元輔・紀時文・坂下重城」

総称「梨壺の五人」(今わら「コ」基本」とか言っても驚かないでしよう。基本。)

三読み「せんよつでん・にちつ」 訳「言羅殿の女御と申し上げた方は「聞」ゆは「言」の謙譲語「けり」過去)」

四読み「こいちよつひだりのおおごどの(振り仮名には逆らえない。)) 人物「藤原師尹」(知らなくてもいいや。)

説明「小一条に邸宅をもち、官位が左大臣であったため。」「理由説明」の語尾は「〜から」「〜ため」「〜」なしは不可。)

同系「四条大納言(藤原公任、公任に藤原行成・藤原信源俊賢をもって「四納言」。尚、行成は「三蹟」の一人。基本。)

五訳「今嫌でいらしやう」たつ(ける「過去」) 敬語「おほしける」あり「尊敬語・中宮から女御への敬意」

六訳「誰が知り申し上げないだろつか、いや、みな知り申し上げてる」(「たれ」=「誰。)

敬語「奉ら・謙譲の補助動詞・中宮から女御への敬意」 助動詞「せむ・打消、む・推量」「打ち消し」不可。)

(「反語は「いや、〜でない」まひ訳す。誰も知らない」の否定は「みな知っている。)

七訳「姫君と申し上げたいわい」 根拠「『聞』えが『言』の謙譲語であるため。」「以下。」「に線引かぬが、ないと不可。)

八読み「ちちおとや」

説明「八行下二段活用動詞『教ふ』連用形『教へ』+謙譲の補助動詞『聞』ゆ『連用形』聞こえ、中宮から女御への敬意

+尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』中宮から小一条の左大臣への敬意 +過去の助動詞『けり』連体形『ける』

内容「まず第一に、字をつまへ書くように心がけ、その次に、七弦の琴を、他人より格別つまへ弾くように心がけ、

その次に、古今和歌集全二十巻を、すべて暗誦するよきを尋問せよ。」「とつた流れがあるが」(「〜いよ。」「〜いよ。」「まな)

【解答は次ページに続く】

【解答編】前ページの続き

九 訳 = 「お習子のけいこをなむ」と「手」 = 「す」、尊敬語の命令「(こ)なむ」と「が訳せていれは可。」

敬語 = 「尊敬の補助動詞」給ひ、命令形「給へ」、父大臣から姫君への敬意。「(御)が尊敬の接頭語」と言えるとおも良い。

十 読み = 「きんのおたこと」 意味 = 「七弦の弦楽器」(「きた」は「七弦(の琴)」を、「じゆ」は「弦楽器の総称」を表す。)

品詞分解 = 「名詞」人 + 格助詞「より」 + 形容動詞ナリ活用「ことなり」連用形「じゆ」

+「八行四段活用動詞」弾まねる、未然形「弾まねるゝ」意志の補助動詞「む」終止形「む」 + 格助詞「と」

+『思ひ』の尊敬語、サ行四段活用動詞「おほす」命令形「おほせ」、父大臣から姫君への敬意。

十一 意味 = 「その次には」(「それができたら」など。「字がうまく書けて、琴も格別の腕になったなら、その上で古今集を」の意)

十二 読み = 「はたまき」(「じゆつかた」は小学生級、「じゆつかた」は中学生的)

品詞分解 = 「八行四段活用動詞」うかぶ、未然形「うかへ」 + 尊敬の補助動詞「す」連用形「させ」、父大臣から姫君への敬意

+ 尊敬の補助動詞「給ひ」連体形「給ひ」、父大臣から姫君への敬意

十三 品詞分解 = 「名詞」御字問 + 格助詞「に」 + 係助詞「は」 + 十変「す」未然形「せ」

+ 尊敬の補助動詞「す」連用形「させ」、父大臣から姫君への敬意

十四 説明 = 「(聞)え給ひける」と「(聞)え給ひける」の「(聞)え給ひける」を連体形とし、係り結びが成立している。

(「と」以前は引用可、よって文末と見なせる。)

十五 説明 = 『言ひ』の謙讓語「聞」も、連用形「聞」え、中宮から女御への敬意

十六 訳 = 「村上天皇がお聞せになつて」と、中宮から小一条の左大臣への敬意、過去の補助動詞「し」連体形「ける」。

+ 尊敬の補助動詞「給ひ」連用形「給ひ」、中宮から村上帝への敬意、過去の補助動詞「し」連体形「ける」。

十七 説明 = 「女御が姫君であつたとき、父から古今集の歌を全て暗誦する」と言われていたこと。

十八 補助動詞 = 「なり・断定 ける・過半」

十九 訳 = 「古今集を持って(女御の部屋に)お出かけになつて」

説明 = 「ラ行四段活用動詞」渡る、未然形「渡ら」 + 尊敬の補助動詞「す」連用形「せ」、中宮から村上帝への敬意

+ 尊敬の補助動詞「給ひ」連用形「給ひ」、中宮から村上帝への敬意、尚「せ給ひ」は「三重尊敬」

二十 主語 = 「村上天皇」 目的 = 「古今集の暗誦試験をするため」。

説明 = 「尊敬の補助動詞」す、連用形「させ」、中宮から村上帝への敬意

+ 尊敬の補助動詞「給ひ」連用形「給ひ」、中宮から村上帝への敬意、尚「させ給ひ」は「三重尊敬」

二十一 訳 = 「(つとも違)妙だとお思(こ)なつたが(「おも)つ」 = 「妙だ、変だ」(「おも)つ」 = 「思(ひ)ぶ」の尊敬語「おも)つ」は「単接」

二十二 説明 = 「ガ行下一段活用動詞」広へ、未然形「広ひ」 + 尊敬の補助動詞「す」連用形「させ」、中宮から村上帝への敬意

+ 尊敬の補助動詞「給ひ」連用形「給ひ」、中宮から村上帝への敬意、尚「させ給ひ」は「三重尊敬」

二十三 説明 = 「村上天皇が、高麗殿の女御に、和歌の詞書を読たひ、それに対する和歌を答へさせた」(「その」は「某の」の意)

二十四 説明 = 「八行四段活用動詞」問ひ、連用形「問ひ」 + 謙讓の補助動詞「聞」も、未然形「聞」え、中宮から女御への敬意

+ 尊敬の補助動詞「す」連用形「させ」、中宮から村上帝への敬意

+ 尊敬の補助動詞「給ひ」連体形「給ひ」、中宮から村上帝への敬意、連用修飾格の格助詞「を」

尚「させ給ひ」は「三重尊敬」(「一方面に対する敬意」と「三重尊敬」が出ているので要チェック。鬼の二連敬語)

二十五 訳 = 「(か)つたのたなあと理解なむ、補助動詞 = 「なり・断定 けり・詠嘆」

(「か)つ」 = 「(か)つ」(心得(じゆん)) = 「理解する、納得する、思う、考える、なむ、場合により意識する。)

説明 = 「天皇が(つとも違)つて御簾などを引いて隔てなすので、妙だと思つたが、詞書をお読みなので、古今集の暗誦試験をやるためだつたのかとその原因がわかり、納得したため、かつなりけり(心得)つた」

二十六 説明 = 「形容詞シク活用」をかし、連体形「をかじき」 + 逆接の接頭助詞「もの」(「もの」は「もの」の「一語」しかも助詞)

評論主 = 「中宮皇子」(「古今集評定」の発言「話者」はNG。)

二十七 意味 = 「覚え違(ひ)」(「記憶違(ひ)」なると同義可。「(ひ)が(僻)は接頭語で「間違(ひ)」。「(ひ)が(事)」 = 「間違(ひ)」(「悪事」

「(ひ)が聞(き)」、「(ひ)が耳」 = 「聞(き)違(ひ)」(「(ひ)が耳」 = 「見聞違(ひ)」(「(ひ)が耳」 = 「事案(じ)違(ひ)」)。

二十八 訳 = 「もし忘れて(る)らるまあつたなほは」(「未然形」は「は否定」「もつ」ならぬ。「たぬ」存続)

補助動詞 = 「たる・存続」 用法名 = 「順接の仮定条件」 記号選択 = 「へ」(「未然形」は「を」を選ぶ)。訳でも一発)

(単に「仮定条件」のみでは「たとえ」だとしても(逆接の仮定条件)を含んでほしいので。)

二十九 説明 = 「助動詞」へし」の文法的意味を特定できないため、「(い)みか(る)じゆ」よりも文意は充分通じてほしいので。

三十 訳 = 「きこ)つてお心を乱(み)なむ」(「わ)ひな)つ」 = 「ひ)る」。へ)つ)を「当然」として「通)な)つ」も可。

補助動詞 = 「ぬ・強意、へし・推量」(「へ)つ)は「当然」も可。「(ぬ)へ)つ)を「当然」として「通)な)つ」も可。

三十一 訳 = 「和歌の方面に精通している人」(「おほめかし」 = 「い)加減」。「い)加減でな)つ」 = 「精通)つ)る」。「わ)れ暗記」)

【解答は次ページに続へ】

【解答編】前ページの続き

三二 意味 = 「お呼び出さるる」(訳せ、なら「お呼び出さるる」上止める。「意味」と「訳」の微妙な違い。) 主体 = 「村上」
三三 訳 = 「書右正謀の得点を数えさせ」(なむひ) (「ひ」の「こ」は手段。「書右を使ひ」。「数」は「正謀の得点」)
説明 = 「力行四段活用動詞『置く』未然形『置か』使役の助動詞『す』連用形『せ』、

尊敬の補助動詞『給ふ』連体形『給ふ』、中宮から村上帝への敬意」
三三 訳 = 「村上天皇が、高麗殿の女御に、無理に申上げ、やむなむひ、たゞしつの時ぞ、(「強ふ」 = 「無理に」+中ね。)

説明 = 「謙讓の補助動詞『聞ふ』未然形『聞ふ』、中宮から村上帝への敬意
使役の助動詞『す』連用形『せ』、尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』、中宮から村上帝への敬意
過去の伝置の助動詞『けむ』連体形『けむ』」

三四 訳 = 「どなたにか素障らしく、おもつらかり、ただたつ」(「めむたつ」 = 「素障らしく」+「をかつ」+「おもつらかり」)
説明 = 「過去推量の助動詞『すむ』の終止形」
「聞ふ」は「無理に」+「ね」。同じくは文脈から「答え(やむ)ね」「申上げ(やむ)ね」「言ふ」に訳す。
「聞ふ」は「ね」の帝。急手は帝。『給ふ』 = 尊敬語 = 急手尊敬。帝を尊敬。謙+使+尊の敬意の方向に注意)

三五 訳 = 「おそはにおしえしつ、たゞしつに入たちまひもが素まこと」(「やぶら」は謙讓語「おしえする」。「やぐ」は「まひま」)
助動詞 = 「けむ・過去の伝置」(伝置 = 「〜しつ」。尚「けむ」は「ひなやまこ」の已然形活用語尾。係り結びによる)
三六 訳 = 「無理に申上げさせなむる」(「せめつ」は副詞「強引」。「やむ」は使役「やす」。「は」原因理由)
敬語 = 『言ふ』の謙讓語「申ふ」未然形「申れ」、中宮から村上帝への敬意

三十七 意味 = 「利口なつ」(「知ったからつ」なむ。現在でも「利口なつ」なむ使役)
言ひおきたこと = 「形容詞『ちかこ』連用形『ちかこ』のウ音便ひ『ちかこ』+なむによる」
三十八 訳 = 「すべ、最後は申上げ、いじはなにけむ」(「申ふ」が首略されたこと。「やがつ」は「すべ」。「そのまむ」
同じくは「すべ」を讀ぶ。「末」は「下の句」よりも「最後」が適。中宮vs女房たちの古今テキスト
村上vs女御の古今テキストは形式が微妙に異なること(この事について注)

三十九 訳 = 「少しも間違えるはなかつた」(「けり」過去)
副詞 = 「つゆ、呼ぶる語」「なかり」(「つゆ」打消語)で「少しも〜なり」。「陳述の副詞」。大書)
四十 訳 = 「やはり何とがつ、少の間違ひを見して終むらじ、ちん」(「なむ」 = 「やれつ」。「やまむ」 = 「上む」+「む」)
副詞 = 「さかひ、呼ぶる語」「む」(「さかひ」意志・希望)と「何とかが〜つちん」。同じく「陳述の副詞」。
品詞分解 = 「力行」一段活用動詞「見ひ」連用形「見ひ」+単純接続の接続助詞「つ」+強意の間投助詞「む」

+力行四段活用動詞「やむ」未然形「やま」+意志の助動詞「む」終止形「む」。(特殊だから聞かれるかも)
四一 訳 = 「わたま、こま、お思になつたが、(「わたこ」 = 「わたまこ」。「こ」は接続の接続助詞)
敬語 = 『思ふ』の尊敬語「おほこめ」連用形「おほこめつ」、中宮から村上帝への敬意」

四二 読み = 「なむ」(「つゆ」かと)と「読めなむ」。「ついか」と「なむ」読めるが高三と「なむ」聞かぬ。「なむ」は類)
活用語 = 「なり・力行四段活用動詞『なる』の連用形。ぬ・元々の助動詞『ぬ』の終止形」
(動詞の「なる」と「ぬ」の「ぬ」それぞれ別の品詞と混乱しないこと)。「なむ」は「つ」は敬語)

四三 訳 = 「また、く、無駄ひめるなむ」(「不用なり」は形容動詞「無駄だ」「無駄だ」。「けり」は敬語)
副詞 = 「なむ」呼ぶる語 = 「不用なり」(「ちち」と分かつくことが、陳述副詞「なむ」は打消語を伴ひ
「なむ」は打消語)で「またく」「決つ」絶対。「けり」の「打消語」は「不」だが
「不用なり」で一語でつづるので呼ぶる語は「不用なり」とつておへ。詳細は採点者へ詰めるべき)

四四 訳 = 「お休になつた」(「ぬむ」は「や」の連体形だが「つ」もつた)と「訳つて
差し障りなきがするは私だけであつたか、いや、そなたとはなむ。でも詳細は採点者へ聞へべき。)
説明 = 『寝(ぬ)』『寝(ぬ)』の尊敬語「大殿籠る」連用形「大殿籠り」、中宮から村上帝への敬意
元々の助動詞「ぬ」連体形「ぬぬ」。

四五 訳 = 「素晴はしになだち、(「めむたし」 = 「素晴らつこ」。「かつ」は急押し終助詞「〜だち」「〜ひあるよ」)
四六 説明 = 『やむ』の「不用なりけり」(「またく無駄であるなむ」とか言ひつづるべし)
「ちや」つまり「來算れつ」(「おしをけれむ」)「不意に身を食らむ」とつづるなむ」

【中古テキストvs.女房たちの古今テキストと村上天皇vs.宣耀殿の女御の古今テキストの形式の違いについて】

このテキストでは「上」に分けたが、冒頭の中古テキストvs.女房たちのテキストでは「中宮が上の可を讀んで」「女房たちが下の可を答える」という形式をとっているのに対し、「中」に記述のある村上天皇vs.宣耀殿の女御のテキストでは、天皇が詞書を読んで」「女御が和歌全体を答える」という形式をとっています。すげえ難しいにも関わらず完璧だったのはやたら頭がよかったのかそれと単純にズレたのか。いずれにせよこの話は有さむべし「大鏡」にも記述があります。恐ろしく宣耀殿の女御。

いと久しかりし、起きさせ給へるに、なほ「このうり勝は負はなむじや
 ませ給はむ、つよむらじより」トの十巻を、明日にあらむ、うりぞ見え給へ
 合はせむじや、今日定めむじや、大殿油参りし、夜更くるまじ、請ませ給ひし
 る、なほ、この御申聞、見え給はせ給はむなりけり。

『上、渡らせ給ひし、かかるといふ』、な

と、殿に申し、奉られたりければ、こみ
 じつめは、これむじや、御誦経なむ、また
 せさせ給ひし、そなたに、向きてなむ、念
 じ書り給ひたる、ちよちよ、つて、あ
 れなる「うらなひ」、なむ、語つて、おれ中給
 ひを、上も聞ひ、つめ、めりさせ給ひ。

「我、三巻、四巻、だ、見え給ひし、と

仰せ給へ、「#せ、な、か、ね、な、う、み、な、を

か、つ、い、そ、め、り、け、」

(改ページ)

(改ページ)

や、て、な、る、う、り、や、は、聞、ひ、ゆ、る、」
 な、む、御、前、に、候、ひ、人、々、上、の、女、房、
 「う、な、た、許、れ、
 れ、た、る、な、む、参、り、し、
 ロ、ク、言、ひ、出、し、な、む、
 した、る、ま、じ、
 ち、お、思、ひ、
 じ、な、く、
 め、び、た、く、ぞ、お、ほ、ゆ、る、」

問題殿 「書」を言わないようにするのがボリシーだったんですが血迷って言っちゃってます。

かと言つて、それだけやつてテストに臨まれても30点アップは夢のまた夢なのでちやちやと全講解してやれよ
 一傍線部「いと久しかりし」を口語訳せよ。

二傍線部「起きさせ給へる」について、「この動作の主体を答え、また品詞分解して文法的説明をせよ。」

三傍線部「なむ」の意味を答えよ。

四傍線部「このうりやませ給はむ」について、「このうり」の凶容を明確に口語訳せよ。

また、助動詞と敬語を指摘し、文法的説明をせよ。

五傍線部「いとむらじより」を口語訳せよ。また、むらじよとついで「いとむらじよ」なのか、文中を参照して説明せよ。

六傍線部「明日にあらむ」を品詞分解し、文法的説明をせよ。また、「(なら)む」について、

問題プリント【中】問一七の選択肢より文法的用法の同じものを選び、その用法名と記号を答えよ。

七傍線部「つよむらじより見え給はせ給ひし」について、「つよ」に適切な漢字を充て、意味を答えよ。敬語を指摘し文法的説明を
 せよ。また、係助詞「そ」の結びについて説明せよ。ついでに「見給ひ合はせむ」の主語を答えよ。

八傍線部「今日定めてむ」とを、主語と目的語を補って口語訳せよ。また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

九傍線部「大殿油参りし」について、「大殿油」の読みを答え、全体を口語訳せよ。また、「参り」を文法的に説明せよ。「この大事

十傍線部「読ませ給ひける」について、主語を明らかにして口語訳し、また、助動詞と敬語を指摘し、文法的説明をせよ。

十一傍線部「つひに負け聞見えさせ給はせむなりけり」について、全体を口語訳せよ。また、品詞分解して文法的説明をせよ。

また、副詞を抜き出し、「これと呼応する語を指摘せよ。」「外せなら、何が何でもこのセンテンスだけは理解してへんよ。」

十二傍線部「上、とは何のことか」を答えよ。(文中の語にも口語訳しなす。

十三傍線部「渡らせ給ひて、かかるといふ」について、省略されていると思われる表現を補った上で口語訳せよ。

十四傍線部「殿に申し、奉られたりければ、」について、「殿」の意味を明確にして口語訳し、活用語を抜き出して文法的説明をせよ。

十五傍線部「御誦経なむ、またせさせ給ひし」について、「御誦経」の読みを答え、全体を口語訳せよ。

また、「せさせ給ひ」を文法的に説明せよ。

十六傍線部「そなたに向きてなむ、念じ書りし給ひける」を、「そなた」の意味を明確にした上で口語訳せよ。

十七傍線部「すまむきじつ、あはれることなり」を口語訳せよ。また、「二重傍線部」なる、及び「なり」を、文法的に説明せよ。

十八傍線部「語り出でさせ給ひを」について、この動作の主体を答えよ。また、敬語を指摘して文法的説明をせよ。

十九傍線部「上も聞ひつめ、めりさせ給ひ」について、主語を明らかにして口語訳し、また、敬語を指摘して文法的説明をせよ。

二十傍線部「我は、だに、見え給ひし」について、発言主を答えよ。また、口語訳し、副詞を抜き出し、「これと呼応する語を答えよ。」

二二傍線部「仰せ給へ」を文法的に説明せよ。

二三傍線部「えせ者なむ、ありけれ」を口語訳せよ。また、「この発言の主を文中の語で答えよ。」

二四傍線部「かやひなることやは聞ひゆる」を口語訳せよ。また、「この発言の主を文中の語で答えよ。」

二五傍線部「上の女房、こなた評されたるなど参りて」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

二五傍線部「つめ思ひごとく、めびたぐぞおほゆる」を口語訳せよ。また、副詞を抜き出し、「これと呼応する語を指摘せよ。」

一 訳「だいぶ長い時間が経って」「じばぶ」程度では不可。尚「久しう」は「久しく」の音便。）
二 主体＝「村上天皇」「上」では限定できない（不可）。
品詞分解＝「力行」二段活用動詞『起く』未然形『起き』＋尊敬の助動詞『ます』連用形『ませ』中宮から村上帝への敬意

尊敬の補助動詞『給ひ』已然形『給へ』中宮から村上帝への敬意

三 意味＝「やほし」「なほ」＝「やはら」「けし」＝「美し」「ちかかじ」＝「なほは言ひつてもやはらじ。）」
四 訳＝「古今集の暗誦試験を勝負をつけずに終わりになる」としたら「やむ」は「止む」で「終わる」「やめる」の意）
助動詞＝「せ・尊敬の助動詞・中宮から村上帝への敬意。む・仮定」「む」は連体形で、準体言の用法。「婉曲、も可。」
敬語＝「給は・尊敬の補助動詞・中宮から村上帝への敬意。尚「せ給は、は三重尊敬。」

五 訳＝「とてもよくなじとたどじひじひ」「よし、は」「言ひつ」「よ思ひつ」「よじひじひ」「なほ、臨機応変じ。）」
説明＝「古今集の暗誦試験の勝ち負けをつけなごま終むじひするじひ」「て～じひ」「ひ」「。」「ないものは不可。以下同じ。）」
（「よじ」＝「よじ」「よじ」＝「悪くなじ」「むじひ」＝「よくなじ」「あじ」＝「悪じ。じひ変化は重敬。）」

六 品詞分解＝「名詞」明日「格助詞」に「十行四段活用動詞」なる。未然形「なら」＋仮定の接続助詞「ば」「（なれば、とは異）
用法名＝「順接の仮定条件」（単に「順接仮定、も可。」）記号選択＝「イ」「（未然形＋ば）は「仮定。大事。）」

七 漢字＝「異」「こと」に漢字を充てる場合、事・言・異、に注意。同じ「言」でも意味は「言語・話・歌」とかアンドーオン。）」
意味＝「天皇が持っているものは別の古今集（女御がマ～古今集でたどむチェックやると面白くなじ。）」

敬語＝「給ひ・尊敬の補助動詞・中宮から女御への敬意。結び＝『見おほす』を連体形とし、係り結びが成立している。』
主語＝「女御」（言耀殿の女御）でも何じもことば。）」

八 訳＝「村上天皇は、女御との古今集暗誦試験の勝負を、今日中に決めよじひ」助動詞＝「む・意志」（意思）不可。）」
九 読み＝「おおとなじら、訳＝「灯火をお点けになじつ」「（オトモシジ、うじ言えぬのか。）」お付け、も可。）」

説明＝『火をともし』意の尊敬語で慣用語。「じひの場合に限り謙讓語ではないので注意。むしろじひで大切なのは読み。）」
十 訳＝「村上天皇が（古今集（の詞書）を）お読みになる、助動詞＝「せ・尊敬・中宮から村上帝への敬意。ける・過去」
敬語＝「給ひ・尊敬の補助動詞・中宮から村上帝への敬意。尚「せ給ひ、は三重尊敬。」

十一 訳＝「最後まで負け申し上げななひななひ、つじまつた、
品詞分解＝「副詞」つじひ、＋力行二段活用動詞『負け』連用形『負け』

＋謙讓の補助動詞『聞ええやも、未然形』聞ええせ、中宮から村上帝への敬意
＋尊敬の補助動詞『給ひ』未然形『給は、中宮から女御への敬意
＋打消の助動詞『ず』連体形『ず』十行四段活用動詞』なる。連用形『なじ』十完了の助動詞『ぬ』連用形『に』
＋詠嘆の助動詞『けり』終止形『けり』尚「やせ給は、は三重尊敬。」

（「聞ええやも、こなたは、聞ええやも、ひたなへ、聞ええやも、ひ一語なので注意。）」
副詞＝「つじひ」、呼称する語＝「お」（つじひ）「打消語」で「最後の最後まで～」なじ。）」

十二 訳＝「上」＝「村上天皇」（単に「帝」「天皇」では今上（一条）天皇と区別できないので不可。）」
十三 訳＝「女御の部屋へいじつやじつ、じひのよひなじひをななひつじまつ、（かかるとじひ）を、古今集の暗誦試験、とじても可。）」
十四 訳＝「女御の父に申し上げに人を遣わし申し上げななひ、たのじ」（フリント末尾【注意すべき表現】参照。割りこじひ。）」
活用語＝「申し・言ひ」の謙讓語『申す』連用形・中宮から小一条の左大臣への敬意
奉じ・遣ひ」の謙讓語『奉る』未然形・中宮から小一条の左大臣への敬意

れ・尊敬の助動詞『る』連用形、中宮から大臣のもじ入遣いをやつた人への敬意
たり・完了の助動詞『たり』連用形、けれ・過去の助動詞『けり』已然形。）」

十五 読み＝「みずきよひ」（誦経）＝「すきやひひ」（誦経）＝「よねやひひ。）」
訳＝「じ誦経なひをあぢいぢいのお寺にやせななひつ、
説明＝「サ変動詞『す』未然形『せ』＋使役の助動詞『たす』連用形『たせ』
＋尊敬の補助動詞『給ひ』連用形『給ひ』中宮から小一条の左大臣への敬意。」

十六 訳＝「内裏の方を向いて、祈つてお時間を過じななひ、（そなた、内裏（言耀殿）。）」暮らす、は「時間を過じず」程度の意）
十七 訳＝「風流で、趣深じひひひひひ、説明＝「前者は形容動詞『あはれなじ』連体形の活用語尾、後者は断定の助動詞『ぬ』」
十八 主体＝「中宮定子」（分かっていると思ひますが、中宮、じひのは身分であつて姓じやないです。今それだけ。姓は藤原。）」
敬語＝「ませ・尊敬の助動詞・筆者から中宮への敬意。給ひ・尊敬の補助動詞・筆者から中宮への敬意。
尚「やせ給ひ、は三重尊敬。」

十九 訳＝「一条天皇もお聞きになじ、感ひななひ、
敬語＝「聞じしめす、聞へ」の尊敬語・筆者から一条帝への敬意。ませ・尊敬の助動詞・筆者から一条帝への敬意
給ひ・尊敬の補助動詞・筆者から一条帝への敬意。尚「やせ給ひ、は三重尊敬。」

【解答は次ページに続へ】

【解答】【前ページの続き】

- 二十 発言主＝「一条天皇」 訳＝「私は 三、四巻でさう読みきれないだろう」「だ」「は」「を」「さ」「は」「まで」も。」）
- 副詞＝「え、呼応する語」じ（打消推量）「～ないだろう」「。」「え」「打消語」で不可能 「～できないだろう」「。」「大專」
- 二 説明＝『言ひの尊敬語』仰す 未然形 筆者から一条帝への敬意 尊敬の助動詞『らる』終止形 筆者から一条帝への敬意
- 三 訳＝「身分の低い者なども、みな風流であつたのだなあ」「えせもの」＝「身分が低い者」「けれ、詠嘆」
- 発言主＝「御前に候ふ人々、上の女房、こなた許されたる」（文中の語で、尚、「こそ、けれ」で係り結び成立）
- 三 訳＝「このよつなことが耳に入つてくる、だろつか、いや、こな、」（直訳、意識して、あるだろうつか、いや、ない、も可。）
- 発言主＝「御前に候ふ人々、上の女房、こなた許されたる」（何人がいて、その内の一人の発言と見るのが妥当）
- 二四 訳＝「一条天皇付きの女房で、中宮の所入出入りを許されている人」（教科書脚注参照。筆者は中宮の側にいるので、「こなた。」助動詞＝「れ・受身、たる・存続」（「受け身、不可」）
- 二五 訳＝「少しも心配事がなく、素晴らう」と思われる」「そ、おほゆる」で係り結び成立「おほゆるは自発で「思われる。」）
- 副詞＝「つゆ、呼応する語」「なく」「つゆ」打消語」で「少しも～ない」「まったく～ない」。
- 「この解釈も【注意すべき表現】参照のこと。）

【注意すべき表現たち】 あくまで青山論。実際に採点するのは先生達だからきちんと教科担任の先生に確認すべき

本文八行目、問十四『殿に申し奉られたりければ』

状況を考えると、「マンタのこの娘さんが天皇と意地の張り合いをやつてるよ」ということを、氣を利かせて内裏の誰かが大臣に伝えるよつ、遣いの者を出したのである。当然大臣は自邸にいる。「この」の「奉る」の意味は「人を遣わす」ところべきであり、「奉られ」の「れ」はその遣わした人間への敬意とよべきである。「人を遣わしなかつた」となる。

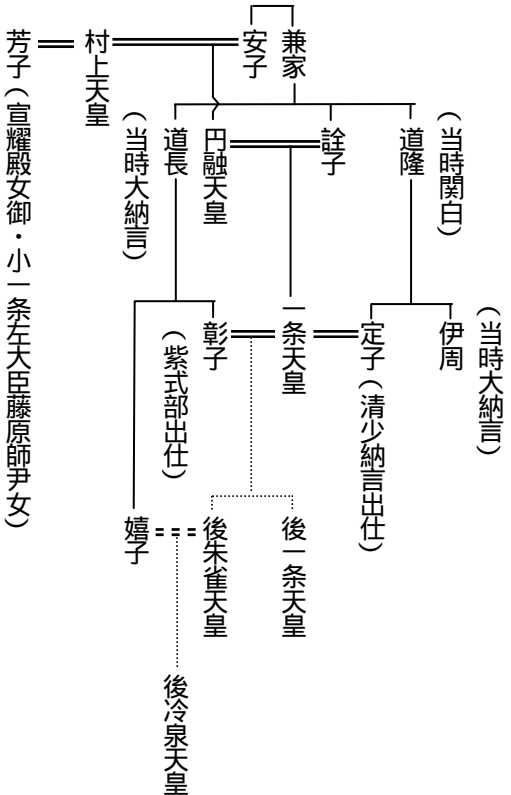
訳は「大臣に遣いをやりなかつたので、である。尚、「たりければ」は「完了過去」即ち「たつた」であるが、単に「た」でよい。本文九行目、問十五『あまた』

「多くの寺社」なのか「何度も・ひたすら」なのか。採点者に聞きに行かなければはっきりしない典型。通例「多くの寺社」。本文十四行目、問二十『見え果つ』

「～果つ」で「～し続ける」「～し終わる」「完全に～しきる」ではあるが、「見る」に「暗誦する」の意味はない。

従つて一条天皇が感心しているのは「宣耀殿の女御の記憶力」ではなく、「村上天皇が二十巻すべて読んだこと」ではないのか。本文三行目、問一五『つゆ思ふことなく、めでたくそおほゆる』

「何の心配事もなく、素晴らう」と思われる。…背景を知らないと何のことがサッパリ分からないこの表現。ちよつとばかし時代背景を説明します。



本段「古今の草子を」は、通常「清涼殿の丑寅のすみの」段の終末とされ、時期としては定子の父道隆が関白の位にあり、道隆一門が栄華を極めていた頃（九九四年三月と見る説が有力。六年後、定子一四歳で崩御）である。ほとんど道隆は没し、定子の兄伊周は花山法皇を弓矢で威嚇したことから左遷、定子も出家と、政権は完全に道長サイドに移行する。本段の執筆はこの事実を経て後から回想したものであるから、当然、当時は道隆一門が没落することなど誰も思っていなかった。よつて、「つゆ思ふことなくめでたくそおほゆる」とつづるのである。「この」められた筆者の想いはかなりのもの。

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

各傍線・記号は、注意すべき表現(体言・用言ほか) 助動詞 助詞 係り結び(または係り結びの消滅・係り結びの省略) 原文にはないが補つべき語 尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

古今集のどじ本を御前に置かして、何首かの歌の上の句をおもひこしむらひ

古今の草子を御前に置かせ給ひて、歌じもの本を仰せられし

「上の歌の下の句は、何首かの歌の上の句をおもひこしむらひ、夜も毎も頭の中におもひて覺えていぬまの歌が

「これが末いかに。」と問はせ給ふに、すべし、夜辱心にかかりておぼゆるもめるが、

すべし、夜辱心にかかりておぼゆるもめるが、

けしち申し出でられぬ、 つかなるぞ。

幸相の君が十首は、お答え申し上げたが、それも覺えていぬまの言えたるは、いせ、言えなむ。

幸相の君ぞ十ばかり、それもおぼゆるが。

まじひ、五首、六首くらしいしか覺えていぬまの言えたるは、ただ覺えていぬまの言えたるは、まじひの言えたるは、

まじひ、五首、六首くらしいしか覺えていぬまの言えたるは、ただ覺えていぬまの言えたるは、

「それなむうた、そひけなく、仰せし言えしまはななく、扱ひし言えしまはななく、いせ、言えなむ。」

「それなむ、けにくへ、仰せ言を映えなむ、まてなすべし。」

困り、残念がるのも、おもひこしむ。

わび、くちをしがるも、をかし。

知っているを申し上げる人がない歌を、そのまま全部読み続けて、夾算をおぼさみになるのを、

知ると申す人なきをば、 やがてみな読み続けて、夾算せさせ給ふを、

「これは、知ってゐる歌であるが、いぬまの言えたるは、物覚えが悪いのだといひ、いせ、言えなむ。」

「これは、知りたることぞかし。なごかう、したなひはあるぞ。」と言ひ嘆へ。

中々も、古今集を何度か書き写したりする人は、本主に全部覺えていぬまの歌であるぞ。

中々も、古今あまた書き写しなごする人は、みなもおぼえぬべきことぞかし。

赤シートを使って暗記・確認用として利用してあげて。

急傍線・記号は 注意すべき表現(体言・用言ほか) 助動詞 助詞 係り結び(または係り結びの消滅・係り結びの省略) 原文にはないが補つべき語 尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

たいそう長い時間が経って 起きなされたが、やはり、この日の勝ち負けをしかないうで終わりにしたくなるという日が

いと久しうありて、起きさせ 給へるに、なほ、この日勝ち負けなくともやませ 給はむ、

大変よくなるといって、後半の十巻を、明日になったら、別の本を見合わせなると思いついて、何となく今日決めたという

いっつもこの日、その十巻を、明日はなほ、この日を見給ひ合はせむといひ、今日定めしむ

灯火に火をつけなるとして、夜が更けるまで読みなすんだ。しかし、最後で負け申し上げなるとなるといって、まだ

大殿油参りて、夜更くるまで読ませ 給ひける。なほ、しひよ。負け聞えさせ 給はずなりにけり。

『天皇様が、いっつもこの日、この日を見給ひ合はせむといひ、女御の父上に申し上げに遣い寄らせ上げなるといふので、たごそそ心配なむといひ

』上、渡らせ 給ひて、かかるといふ。なほ、殿に申して奉られ たりけれぬ、いみじくもほごれむといひ

御誦経などいまだせさせ 給ひて、そなたに向きてなむ、念じ書ひて 給ひける。

御誦経などいまだせさせ 給ひて、そなたに向きてなむ、念じ書ひて 給ひける。

風流で、 趣き深いというのである。 なほ、お話したものを (一条)天皇様も聞きなれり、感になれぬ。

すれどもこの日、あはたなる日なり。「なほ、語り出せさせ 給ひて、上も聞ひて、めつれさせ 給ひ

」私、三巻、四巻で、読み終へる日だから、なごだぬ。「いっつもこの日、なほ、

「我は、三巻、四巻だに、見え果てじ。」と仰せらる。

「昔は、身分の低い者なども、みな風流であったのだなあ。」

「昔は、えせ者なども、みなをかこつていそありけれ。」

「この日は、この日を見給ひ合はせむといひ、聞へるかなむいひな、なほ、

「この日は、かぜしなる日とせは聞ひぬぬ。」なほ、

中高様にお任せ申し上げている人々や、

御前に候ひ入々、

天皇様付きの女房で、この日の出入りを許されて、いる人などが参上して

上の女房、いなた許され、たごなむ参りつ、

口々に言い出したという時は、 本当に、まったく心配事がなく、素晴らしい(ひと時だった)と思われぬ。

口々言ひ出はなすしたるほむは、まじり、しゆ、思ひ出はなす、めつたくとおほゆぬ。